

ボイヤーの『スカラシップ再考』を再考する

～研究と教育の「融合」～

Reconsidering Boyer's "Scholarship Reconsidered" The "Fusion" of Research and Teaching

土持ゲーリー法一 (京都情報大学院大学)

Gary H. Tsuchimochi (The Kyoto College of Graduate Studies for Informatics)

Abstract

1990年、カーネギー教育振興財団会長であったボイヤー (Ernest Boyer) が提案した『スカラシップ再考』 (Scholarship Reconsidered) は、スカラシップの新しいパラダイムを示唆し、アメリカ高等教育における「ティーチングからラーニングへ」のパラダイム転換を示唆した。ボイヤーは、大学教授職のミッションを再構築し、知識の「発見」や「統合」だけでなく、「応用」や「教授」もスカラシップの範疇に入ると主張した。

その後、ボイヤーを継承してカーネギー教育振興財団会長に就任したシュルマン (Lee Shulman) は、「教授のスカラシップ」を教育実践に結びつける方法を模索し、Carnegie Academy for the Scholarship of Teaching and Learning (CASTL) プログラムを立ち上げ、SoTL (Scholarship of Teaching and Learning) へと展開させた。

約30年が経過した現在、スカラシップの考え方に変化が見られるだろうか。1990年以降、大学教育は大きく変動し、アクティブラーニング、学習パラダイムへの転換、そしてコロナ禍による影響などが大学の在り方に影響を与えている。日本においてSoTLの発展が遅れている原因の一つは、横断的な発想が乏しいからである。これは、戦後大学改革の失敗と伝統的な日本のタテ社会による人間関係からくるものと考えられる。具体的には、旧態依然として、教員が中心となり、学習者との「横のつながり」が欠落しているところに原因がある。今後、いかに研究と教育の「融合」を図るかが焦眉の急である。

In 1990, Ernest Boyer, the President of the Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, introduced "Scholarship Reconsidered," which proposed a new paradigm for scholarship and played a pivotal role in triggering subsequent paradigm shifts in higher education. Boyer redefined the mission of university professorship to encompass not only the "discovery" and "integration" of knowledge but also "application" and "teaching," recognizing them all as aspects of scholarship.

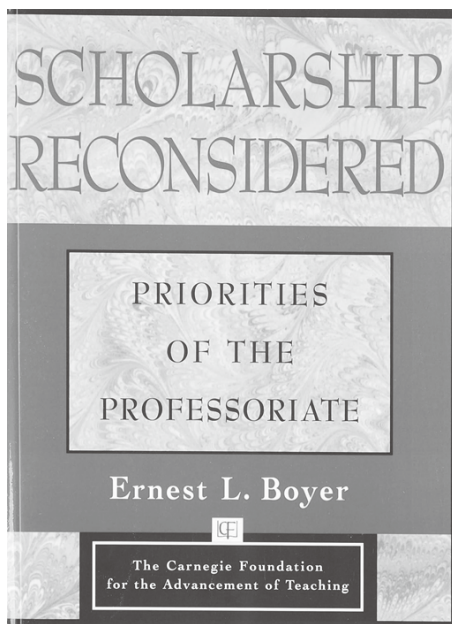
Lee Shulman, who succeeded Boyer as the President of the Carnegie Foundation, actively explored concrete ways to align the scholarship of teaching with exemplary educational practices. He launched the Carnegie Academy for the Scholarship of Teaching and Learning (CASTL) program, evolving the concept of professorial scholarship into the Scholarship of Teaching and Learning (SoTL).

As approximately 30 years have passed, is there a change in the concept of scholarship now? Since 1990, higher education has undergone significant transformations, including the rise of active learning, shifts in learning paradigms, and the impact of events like the COVID-19 pandemic, all influencing the evolution of universities. In Japan, one of the reasons for the delayed development of the Scholarship of Teaching and Learning (SoTL) may be the lack of a cross-disciplinary perspective, which could be attributed to the failures of post-war university reforms and the influence of Japan's traditional vertical society and interpersonal relationships. Specifically, a key issue was the persistence of a teacher-centered approach, resulting in a lack of "horizontal connections" with learners. Now on, it is of utmost importance to figure out how to achieve the fusion of research and teaching.

1. 「研究か教育か」の論争

ボイヤー (Ernest Boyer) が 1990 年に刊行した *Scholarship Reconsidered: Priorities of the professoriate* は、『大学教授職の使命—スカラシップ再考』(日本語訳有本章)(玉川大学出版部, 1996年)と訳され, その「日本語への序文」には, 『スカラシップ再考』の目標は, 教授団が優先事項とした「教育か研究か」という手垢に染まった論争を乗り越え, スカラシップの新しいパラダイムが提供できると述べている。

第1章「スカラシップの変遷」では, 当時, アメリカにおける大学教員の職務である「研究かそれとも教育か」が議論され, 伝統的な「研究業績をあげるかそれとも大学を去るか」(“publish or perish”)が論争されたことを示唆している。彼は「支配的な見解によれば, 学者とは研究者のことであり, 業績の公表は学者としての生産性を測定する第一義的な判断基準である」と述べている。



第2章「展望の拡大」では, 「ほとんどすべての大学は, 教育, 研究, 社会サービスの三者に対して口先だけでは同意しながらも, 教授の業績評価をする段になると, この三者が同等の価値を与えられることはめったにない」と批判し, 「今日, われわれが『学者らしい』という場合には, 通常では, 大学教員であること, そして研究に携わり論文を公表していることを意味する」と述べている。しかし, 「教育は, 最も理想的な状態では, 研究と実践の両方の形をとるべきである」と批判している。そのうえで,

「教授の仕事は別々の, だが重なり合う4つの機能を持っていると考えることができるということである。すなわちその4つの機能とは, 発見のスカラシップ, 統合のスカラシップ, 応用のスカラシップ, 教授のスカラシップである」と言明している。

「発見のスカラシップ」は, いわゆる大学人が「研究」について語る場合の意味に最も近い。この時点では, まだ「教授のスカラシップ」であって, SoTL (Scholarship of Teaching and Learning) という考えは表面化していなかった。

2. 「教育から学習へ」の新しいパラダイム

ボイヤーは, 『スカラシップ再考』を「新しいパラダイム」と位置づけている。すなわち, 1990年の段階で, アメリカ高等教育における「ティーチングからラーニングへ」というパラダイム転換を示唆していたことは見逃せない。事実, バー (Robert B. Barr) とタグ (John Tagg) は, 1995年に「学習パラダイムへの転換」を提唱している。これは, 教授という手段を目的のように捉えるのをやめ, 学生の学びを目的としなければならないと主張した。このような考え方はアカウントビリティ重視の流れとあいまって, 全米的に受け入れられた。

筆者は, SoTLの変遷を見るには, ティーチングからラーニングへのパラダイム転換と比較すれば分かりやすいと考えている。バーとタグの共著論文は, きわめて重要なドキュメントであるにもかかわらず, 正式な日本語訳は長く存在しなかった。そこで, 筆者は共同執筆者タグ氏を介して, 出版社から日本語への翻訳権を取得して, 全訳を「教育から学習への転換～学士課程教育の新しいパラダイム～」と題して刊行した。

同論文には, 以下の図表「教育パラダイムとの比較一覧」が収録されている。

	教育パラダイム	学習パラダイム
① 使命と目的	<ul style="list-style-type: none"> * 教育を提供/伝授する * 知識を教員から学生に移譲する * コースやプログラムを提供する * 教育の質を改善する * 多様な学生のアクセスを可能にする * 教育を提供/伝授する 	<ul style="list-style-type: none"> * 学習を生み出す * 学生から知識の発見や考えを誘い出す * 強力な学習環境を創造する * 学習の質を改善する * 多様な学生の成功(成果)を可能にする * 学習を生み出す
② 成果の基準	<ul style="list-style-type: none"> * インプット、資源 * 入学する学生の質 * カリキュラム開発と拡大 * 資源の量と質 * 在籍登録者数と収入の増加 * 教員と教育の質 	<ul style="list-style-type: none"> * 学習と学生の成果の結果 * 卒業する学生の質 * 学習技術の開発と拡大 * 成果の量と質 * 集学的学習の伸びと能率 * 学生の学習の質

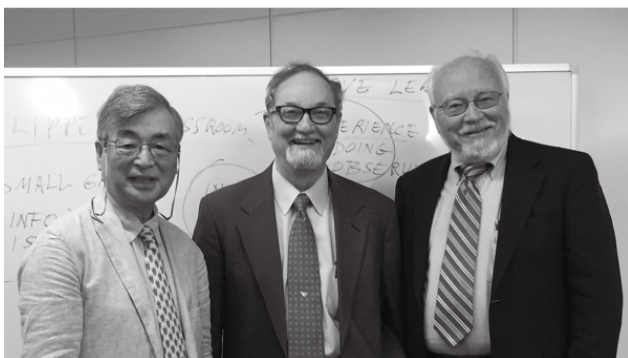
	教育パラダイム	学習パラダイム
3	<ul style="list-style-type: none"> 原子論的～全体よりも部分重視 時間は一定に保ち、学習は変動する 50分講義、3単位コース クラスは一齐に開始/終了する 1クラスに教員が1人 独立した学問分野、学部 教材をカバーする コース終了時の採点評価 クラス内で担当教員による成績評価 プライベートな評価 学位は単位時間数の累積に相当する 	<ul style="list-style-type: none"> 学習環境 学生の準備ができたとき環境の準備ができる 学習体験がうまくいかなら、なんでも可能 学習分野や学部を超えた協同 規定した学習成果をあげる 開始前/中間/終了後の評価 外部による学習の評価 公的な評価 学位は、証明された知識及び技能である 学習環境 学生の準備ができたとき環境の準備ができる

	教育パラダイム	学習パラダイム
4	<ul style="list-style-type: none"> 知識は“外に”ある 知識は指導者が伝授する“塊”や“断片”で現れる 学習は累積で直線的である 知識の倉庫という喻えに合致する 学習は教師中心に管理される “活気ある教師”、“活気ある学生”が求められる クラスルームと学習は競争的で個人主義的である 才能や能力はわずかである 	<ul style="list-style-type: none"> 知識は一人ひとりの心の中にあり、個人の体験によって形成される 知識は構築され、創造され、“取得される” 学習は枠組みの重なりで相互作用である 自転車の乗り方を学ぶ喻えに合致する 学習は学生中心に管理される “積極的な”学習者が求められるが、“活気ある”教師は不要 学習環境と学習は協力的、協同的、助け合いである 才能や能力があふれている

	教育パラダイム	学習パラダイム
5	<ul style="list-style-type: none"> 教育を提供/伝授する 知識を教員から学生に譲渡する 	<ul style="list-style-type: none"> 学習を生み出す 生産性の定義～学生一人当たりの学習単位に対するコスト
6	<ul style="list-style-type: none"> 教員は主として講義者である 教員と学生は独立して別々に行動する 教師が学生を分類し選別する スタッフは教職員と指導過程を援助/支援する 専門家は誰でも教えることができる 直線的な管理～独立した役者たち 	<ul style="list-style-type: none"> 教員と学生は一緒に、あるいは他のスタッフも加えてチームで活動 教師は学生それぞれの能力や才能を引き伸ばす スタッフ全員が、学生の学習と成果を作り上げる教育者である 学習力を高めることは骨が折れる、複雑なことである 共同管理～チームワーク 教員と学生は一緒に、あるいは他のスタッフも加えてチームで活動

出典：ロバート・バー＆ジョン・タグ「教育から学習への転換—学習課程教育の新しいパラダイム—」『主体的学び』創刊号（東信堂、2014年）

この図表は、「教育から学習への転換」を考察する上でのバロメーターになる。教員自らが現状を分析し、どこまで進化しているかを自己診断できるように表した。



写真：左から筆者、授業デザイン権威者ディー、フィンク、学習パラダイム提唱者ジョン、タグ（2018年6月15日撮影）

3. カナダにおける SoTL の活動

2023年6月カナダのプリンスエドワード島で開催された STLHE (Society of Teaching and Learning

in Higher Education) 学会に出席した。参加理由は二つあった。一つは、世界中で話題の生成 AI による ChatGPT による大学教育への脅威に対して、カナダの学会がどのように臨んでいるのかを知るためであった。もう一つは、SoTL における教育、学習への学術的な取組みに関するワークショップに参加することであった。

前者の ChatGPT については、「ChatGPT とどのように付き合うか～いま、大学教育の存在意義が問われている」と題して、『教育学術新聞』（2023年9月13日付け）で発表したもので、本稿では、後者の SoTL についてアメリカとの比較から考察する。SoTL の考えは、未だに周知が不十分であり、日本では、管見の限り、正式な学会もない。SoTL は、教育、学習に関するスカラシップであり、教員の授業改善と密接なつながりがあるにもかかわらず、学会もないということは、この分野がいかに日本で遅れているかを裏づけるものである。

SoTL が普及しない原因の一つは、「SoTL とは何か」が十分に理解されていないところにある。言うまでもなく、学生に対する教育と学習のあり方は時代とともに変化している。コロナ禍でのオンライン授業や生成 AI による ChatGPT の影響は、SoTL の考えに大きなインパクトを及ぼしている。そのような混沌とした時代であればこそ、SoTL についての理解を深めるべきである。筆者は、変化する時代の教育、学習を考えるには、スカラシップの「再考」しかないかと考えている。

4. カナダ SoTL 学会によるワークショップ

2023年6月13日に STLHE 学会大会で、カナダ SoTL 学会 (Melanie Hamilton 会長) が主催する SoTL ワークショップに参加した。

「SoTL がすべてを変える」と題するプレカンファレンス、ワークショップ STLHE 2023 (SoTL: The Party that will Change Everything Pre-Conference Workshop STLHE 2023)」に参加した。ワークショップ企画者の一人である Andrea Webb 教授 (ブリティッシュコロンビア大学) が発表用 PPT を提供してくれた。彼女の肩書は、Co-chair, International Program for the Scholarship of Educational Leadership, Faculty of Education, The University of British Columbia で、SoEL となっているところから、SoTL とも関係があること



写真：筆者と Andrea Webb 教授（プリティッシュコロンビア大学）2023年6月13日撮影

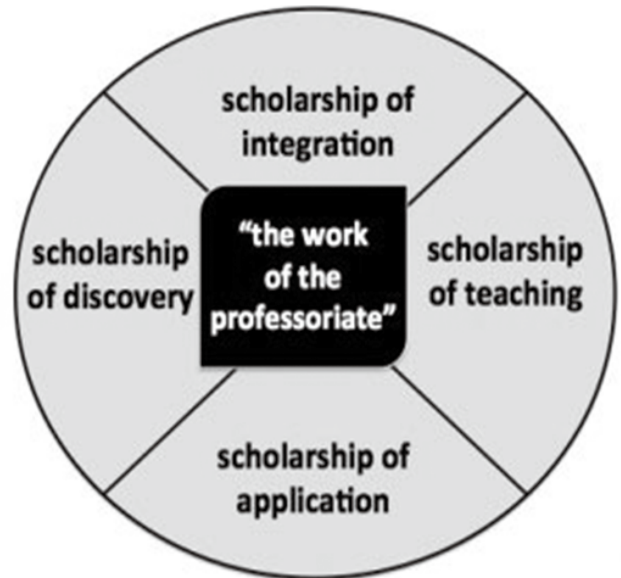
がわかる。SoELの詳細なプログラムについては、<https://international.educ.ubc.ca/soel/> を参照。

プレゼンテーションの冒頭で、「SoTLとは教室を『探求の場』と位置づけ、学習について学生の質問に答えることで教室を改善し、教員をより優れたプロフェッショナルへと向上させることである」(Huber & Hutchings, 2005, p. 1 SoTL) とのフレーズを引用している。すなわち、カナダにおけるSoTLは、教室における学生と教員相互の「探求の場」であるとの位置づけである。

5. ボイヤーの4つのタイプの「スカラシップ」

以下の図表のように、カナダでも4つのタイプの「大学教授職の優先事項 (Priorities of the professoriate)」が重視されている。すなわち、

- 1) 発見のスカラシップ (Scholarship of discovery)：教授団が「研究の探究、新しい知識や技術の創造と普及」をする。
- 2) 統合のスカラシップ (Scholarship of integration)：独創的な研究、とくに学問分野間で解釈して新たな洞察をもたらすことを目指すものである。また、発見のスカラシップ「独自の研究」(自身のものであれ、他者のものであれ)が、既存の枠組みにどのように適合するかを示す。
- 3) 応用のスカラシップ (Scholarship of application)：この研究領域では、結果的な問題に取り組む(あるいは応用する)ために、研究をどのように活用できるかを考える。この応用において、新たな発見や統合の分野が見つかる可能性がある(学問的な研究を非学問的な環境に応用することで、



出典：「大学教授職の優先事項 (Priorities of the professoriate)」(SoTL: The Party that will Change Everything Pre-Conference Workshop STLHE 2023 から作成)

どのように学問的にできるかを考える)。

4) 教授のスカラシップ (Scholarship of teaching)：専門分野の知識からはじまり、学生と教員の対話の中で知識を広げる、がそうである。

カナダでは、ボイヤー以前の学問分野においては、社会学や心理学などの専門領域に焦点を当てた学術研究が主流であったが、1990年以降は、SoTL研究の影響で学問分野を「横断的」に考えるように変わった。たとえば、社会学といった単独の研究ではなく、社会学を基礎としながらも、より広い学際的な視点で考えるように変わった。

4つ目の「教授のスカラシップ」のところの「合意」が困難であった。教授という活動には知識の発見、統合、応用が含まれることから、他の要素とは次元が異なるという解釈もあったが、この点についてボイヤー自身に曖昧さが垣間見られた。

その後のボイヤーについては、間篠剛留、他の論文「ポスト、ボイヤーのスカラシップ論」に詳しい。彼の後を継いでカーネギー教育振興財団会長に就任したシュルマン (Lee Shulman) は、教授のスカラシップの考え方を優れた教育実践につなげるための具体的方法を精力的に検討した。そして、Carnegie Academy for the Scholarship of Teaching and Learning (CASTL) と呼ばれるプログラムを立ち上げるとともに、ボイヤーの提示した「教授のスカラシップ」を SoTL へと発展させた。

6. カナダにおけるティーチングの「つながり」

以下の図表「ティーチング、コンティニウム (Teaching Continuum)」からも明らかなように、教育の「つながり」が SoTL へ導くとの認識である。すなわち、「効果的な教授法 (Effective Teaching)」(省察, 好奇心) からスタートして, 「学術的教育 (Scholarly Teaching)」(文献収集, 教授法の改善) そして, 最終的に「SoTL」へのつながりがそうである。

7. カナダの大学の SoTL 修士課程プログラム

カナダ SoTL 学会会長 Melanie Hamilton 博士の所属するサスカチュワン大学 (University of Saskatchewan) には, Jane and Ron Graham Centre for SoTL という名称のセンターがあり, 彼女は同センター長である。また, 同センターは, SoTL 修士号を授与する大学院とつながり, 博士号へのアクセスも可能にしている。以下がホームページである。

カナダにおいては, 将来の SoTL 人材をどのように養成しているのだろうか。同大学院マスタープログラムを調べることで, その理解が深められるのではないかと考え, 同大学ホームページから SoTL 修士課程プログラムについて調べた。

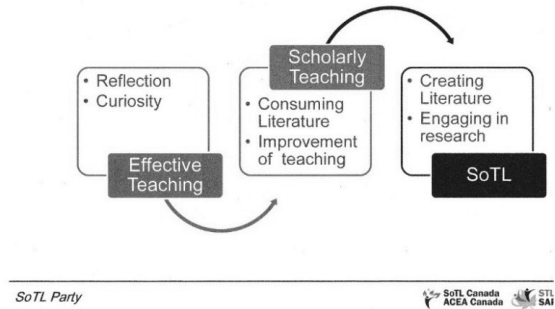
SoTL 修士課程プログラムは, 教育と学習に焦点を当てた新たな学術的探究の動きの中で生まれた。その目的は, 分野固有の専門知識や最良の教育実践の特徴を調査し, それを公表することで学習を改善を促すというものである。

MSoTL ハイブリッドプログラムによる修士課程プログラムは, SoTL 研究を実施するための専門レベルの研究を提供している。専門的な研究を遂行する場合は, 専門知識を構築するための方法論のコースを履修する。リーダーシップを発揮し, 他者の成



スクリーンショット：指導している Hamilton センター長
(<https://grad.usask.ca/programs/scholarship-of-teaching-and-learning.php#top>)

Teaching Continuum



(出典：SoTL: The Party that will Change Everything
Pre-Conference Workshop STLHE 2023)

長を促したいのであれば, リーダーシップやチェンジ, エージェンシーに重点を置いた科目を履修することになる。

この修士課程プログラムでは, 教授と学習の専門家として, 次のことを学ぶ。

- ・専門分野の教育と学習の重要性との違いを理解する。
- ・教育現場に適した研究方法を開発し, 学生との関係に焦点を当て, 分野やコンテクストに適応させる。
- ・SoTL 研究を実施し, 成果を従来型, 非従来型のアカデミックな場で共有する。
- ・様々な場面において他の教育者を指導し, 自らの教育, 学習を探究し, エビデンスに基づく改善を支援する。

以上から, 同大学院において SoTL を目指す専門家にどのようなプログラムが提供され, 指導されているかを知ることができる。このような教育と学習に関わる「エージェント」的な役割を担う重要な人材の養成は, 日本の大学院でも行われるべきである。

8. ブリティッシュコロンビア大学 SoEL

ブリティッシュコロンビア Andrea Webb 教授は, 前述のように, 同大学の教育学部, カリキュラムと教授法学科の Scholarship of Educational Leadership (SoEL) 国際プログラムに所属している。これも SoTL の「横のつながり」と関連するもので「スカラシップ再考」に値すると思われる。彼女が執筆した論稿 “Navigating the Lows to Gain New Heights: Constraints to SoTL Engagement” の「SoTL 関与への制約」には, カナダにおいても SoTL への関与が制約されていたことを示唆している。たとえば, 冒頭で「伝統的な学問文化は, ほと

んどの学者を学問分野のサイロ（縦割り型、タコつぼ型）に閉じ込めるだけでなく、昇進と終身在職権の要件は、教員が SoTL の仕事を『机の脇で』行うことを強要した」と否定的に述べている。そして、SoTL リーダーシップ、プログラムに在籍する教育指導者が、SoTL を理解する上で何が制約となっているかを調査した最近の研究成果をまとめたのが彼女の論稿の骨子となっている。

カナダでは、研究 40%、教育 40%、奉仕 20% という伝統的な職務構成があるが、研究重点型大学 (RIU) においては、教育や学習よりも、学問分野にウエイトが置かれている。

詳細については、同論稿を参照してもらいたいが、Webb 教授は、「SoTL リーダーシップについての専門知識が不足している」ことが一つの原因であると分析している。すなわち、SoTL を促進するには、「リーダーシップ」としての専門知識が不可欠との認識である。

9. アメリカ Milton Cox 博士への 単独インタビュー

SoTL については、カナダとアメリカを比較すると分かりやすい。アメリカについては、拙著『非常事態下の学校教育のあり方を考える～学習方法の新たな模索』（東信堂、2021 年）第 8 章「世界の学校教育はどこに向かっているのか」の論考 22 に詳しいが、同書では、「スカラシップ」を「学識」と訳し、図表も「教育学術研究と SoTL 学識研究の継続的サイクル」と記述しているが、混乱を招く恐れがあるので、本稿では英文のままで紹介する。

2018 年 11 月 14 日、マイアミ大学で開催された Lilly Conference に参加して、SoTL 文献研究の第一人者である Milton Cox 博士へ単独インタビューを断行し、「SoTL 文献研究」とは何かの核心に迫った。

彼によれば、「SoTL 文献研究」で重要なことは、証拠にもとづいた研究でなければならないということである。以下の図表「The Ongoing Cycle of Scholarly Teaching & the Scholarship of Teaching and Learning (SoTL)」にもとづいて具体的に説明してくれた。

まず、「Knowledge Base of Teaching and Learning

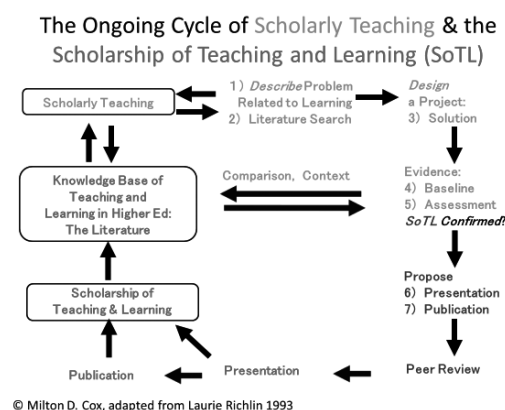


写真：マイアミ大学 Milton Cox 博士、
Lilly Conference の受付にて
(2018 年 11 月 14 日撮影)

in Higher Ed: The Literature」からスタートする。そこでは、高等教育におけるティーチングとラーニングに関する知識にもとづいて、「文献研究 (The Literature)」を証拠に裏づけて検証する。次が「Scholarly Teaching」であるが、ここでは、どのような研究が行われたかの先行研究を調査することを目的としている。これが最初のステージとなる。

次に、高等教育に関する SoTL 文献研究をはじめめる。1) 学習に関連した問題を提起し、2) 学習に関連した文献調査を行い、プロジェクトをデザインし、3) 問題を解決する。続いて、4) 比較基準値を明確にし、最初の文献研究と比較考察して、5) アセスメントを行う。このことで文献研究とは何か鮮明になり、「SoTL 文献研究」に値するかどうか判断できる。次に、6) 発表、7) 刊行のためのプロポーザル提出へと進み、ピアレビューされて承認される。

すなわち、「SoTL 文献研究」においては、ピアレビューが「登竜門」となる。その後、発表するか刊行するかで「SoTL 文献研究」として貢献でき、論文にまとめることができる。この図表の流れから、ピアレビューまでは単なる教育学術研究に過ぎず、



「SoTL 文献研究」には値しない。

なぜ、「SoTL 文献研究」では多くの手続きを踏まなければならないのか。単なる学術論文では駄目なのか素朴な疑問が残る。Cox 博士によれば、「ファカルティ、ラーニング、コミュニティ (FLC)」というコミュニティによる相互作業を経るプロセスがあり、そこで議論される必要があるからであると説明した。

10. ファカルティ、ラーニング、コミュニティ (FLC)

日本ではあまり馴染がない用語である。Cox 博士の論文 (Introduction to Faculty Learning Communities) によれば、「ファカルティ、ラーニング、コミュニティは、孤立した教員同士のつながりを作り、教育学的課題を追求する教員ネットワークを構築する」ことであると述べている。

Learning Communities について、Boyer (1990) がカレッジ (College) と大学 (University) を学習共同体 (Learning Community) と呼び、高等教育におけるラーニング、コミュニティには多くの意味合いが含まれると述べている。

以下の写真は、Cox 博士の “Designing, Implementing, and Facilitating Faculty Learning Communities: Enhancing the Teaching and Learning Culture on Your Campus” のワークショップのときに撮影したものである。

FLC は、Cox 博士がマイアミ大学で組織化したもので、6 名から 15 名 (8 名から 12 名が推奨) で構成され、教育と学習の強化に関するカリキュラムやセミナー活動を通して、「1 年間のプログラム」に従事する教職員グループのことであると定義づけている。

現在の FD ワークショップやコンサルティングは、表面的な学習や「シングルループ学習」(深く考察することなく、結果を得る行動) しか提供していないのに対して、FLC は、深い「ダブルループ学習」(行動の適切さについて慎重に省察) を参加者に提供することができる。従って、どのようなトピックであれ、FLC のメンバーはそれについて深く学ぶだけでなく、1 年間を通して、他の FLC メンバーと共に考えながらデザインし、実践していくことになる。その結果、FLC プログラムは、若手



写真：Cox 博士のワークショップのプレゼンテーション (2018 年 11 月 14 日撮影)

教員と経験豊かな教員、孤立した教員と経験豊かな教員とをつなぐ「架け橋」となる。まさしく、「横のつながり」が重視される。

11. 「SoTL 文献研究」とは何か

Cox 博士によれば、「SoTL 文献研究」には証明書のようなものがない。なぜなら、プロポーザルがピアレビューされた後に認められ、雑誌論文に掲載されたかどうかでしか判断できないからである。レファレンスに論文がピアレビューされた後、「SoTL 文献研究」として確認できる。「SoTL 文献研究」は、研究者の専門分野を証明するに過ぎず、他者に引用され、レファレンスに明記され後ではじめてわかる。

研究者はピアレビューを経て、発表、刊行して SoTL 文献研究者 (Referenced Scholar) であることが証明される。したがって、レファレンスされることが判断基準となる。

12. カナダ STLHE とアメリカ FLC の違い

カナダの STLHE 学会は、「3M スカラー」としての認定書を授与している。Cox 博士によれば、「3M スカラー」を SoTL と同等のものとして位置づけていないが、専門分野においてレビューされれば、FLC の SoTL スカラーに相当すると述べている。

「SoTL 文献研究」は専門分野のことであり、どの学会においても発表が認められる。たとえば、カナダの STLHE 学会において Teaching and Learning に関するプロポーザルが受理され、発表、刊行され、レビューされれば、「SoTL 文献研究」と呼ぶことができる。したがって、多様なチャネルを通して、「SoTL 文献研究」に貢献できる。多く

の場合は、数学や歴史などの専門分野において、「SoTL 文献研究」として寄与している。

13. SoTL テーマの変遷

これまで、アメリカでもカナダでもクラスルーム活動に限定された「SoTL 文献研究」であったが、クラスルーム活動だけに留まらなくなった。たとえば、高等教育におけるカリキュラム研究も、サービスマニエールも学生の学習にどのように影響したかの研究であれば対象となる。初年次教育もティーチングとラーニングにつながるものであれば、「SoTL 文献研究」と呼ぶことができる。クラスルーム活動データを用いて実証的に学術研究が「SoTL 文献研究」と考えられたが、統計的、数量的データだけでなく、質的データによる裏づけも認めるよう変った。

14. FLC と SoTL の相互関係

SoTL の考えは、ボイヤーから生まれたが、FLC の考えはそれよりも 10 年前から存在した。しかし、SoTL とは呼ばなかった。FLC は、SoTL のティーチングとラーニングに関する学術研究を「コミュニティ」として形成したという経緯がある。

ボイヤーが、1990 年に Lilly Conference でティーチングとラーニングに関する基調講演を行ったとき、Cox 博士の共著者 Laurie Richlin 博士が、当時、SoTL に関する学位論文を執筆中であったことから、ボイヤーは基調講演が終わると、彼の原稿を彼女にプレゼントしたとのエピソードを語ってくれた。Cox 博士によれば、彼女はボイヤーの影響を強く受けた。論より証拠、前掲の図表「The Ongoing Cycle」は、彼女が 1993 年にまとめたものであることが、出典からも明らかである。すなわち、ボイヤーの SoTL の考えと Cox 博士の FLC の考えには相互関係があったことがわかる。FLC に関する科学的な研究調査によれば、FLC は活動を継続できることが証明されている。なぜなら、長い時間かけて同僚と議論するコミュニティを形成しているからである。

15. 今後の課題：研究と教育の「融合」

最後に、本稿の副題「研究と教育の『融合』」が、「スカラシップ再考」を再考するということについてである。「融合」と言えば、STEM から STEAM への移行に伴う「芸術 (A)」を想起する。この融合は、世界中で革命的な考え方の原動力となった。

STEM から STEAM への移行において、芸術 (A) が導入され、科学、技術、工学、数学に芸術が「融合」されたように、研究と教育もまた融合すべきだと筆者は考えている。この融合を促進する媒体として、「スカラシップ (Scholarship)」が効果的であることを強調したい。換言すれば、スカラシップは研究と教育を「触媒」として機能し、これらを活性化させる要素となると考えられるからである。ここでの「触媒」とは、化学反応を促進するものを指す言葉であり、スカラシップが研究と教育の相互作用を促進させる効果があると捉えている。

FD や SoTL の呼称は混乱を招きやすい。Cox 博士によれば、FD には広範な意味合いがあり、より良い講義者 (Lecturer) になることもその一つで、そのような教員を開発 (Develop) する目的がある。FD は、SoTL の一つの領域であって、教員が SoTL に関与することで、より良い教員 (Teacher) となり、学生がより良く学ぶことができると述べている。すなわち、FD はより良い「講義者」を育て、SoTL はより良い「教員」を育てると両者を峻別している。ここにも「スカラシップ再考」の必要性がある。

FD という言葉は、アメリカで生まれたが、現在は「死語」である。日本において FD の義務化が叫ばれはじめたとき、本場アメリカではすでに「死語」になっていたことを考えれば「滑稽」であり、日本がいかに「疎い」かの証でもある。なぜ、アメリカでは FD という名称が「死語」になったのか。それは、アメリカの大学教員はステータスが高く、自らを確立した教授 (Established Professor) との自負が強いからである。FD に代わって、学習パラダイムへの転換を機に、CTL という名称が使われはじめた。これは、Center for Teaching and Learning の略で、CTL は学習者の視点に立って、授業改善を見直す動きの中で生まれた。

ボイヤーの著書の原動力は、「スカラシップとは何か」を再考することであったが、日本では、まだ、道半ばである。その語源は 1530 年代に「学者の地位」を意味する scholar と -ship から成る言葉が生まれ

た。筆者は、この語尾の -ship に含まれる資質こそが、リベラルアーツ教育によって培われる素養であると考えている。したがって、大学教育においては、複眼的、鳥瞰図的な洞察力と柔軟性を育むリベラルアーツ教育にもとづくカリキュラム開発が焦眉の急である。

参考文献

- [1] 土持ゲーリー法一「SoTL 学識研究」への誘い～ファカルティ、ラーニング、コミュニティの形成～(『教育学術新聞』2019年5月8日)
- [2] 土持ゲーリー法一「文理融合を促すリベラルアーツ教育～STEMからSTEAMへ」(『教育学術新聞』2022年4月20日)
- [3] 土持ゲーリー法一「ChatGPT とどのように付き合うか～いま、大学教育の存在意義が問われている～」(『教育学術新聞』2023年9月13日)
- [4] 土持ゲーリー法一『非常事態下の学校教育のあり方を考える～学習方法の新たな模索』(東信堂, 2021年)
- [5] 土持ゲーリー法一『ポートフォリオが日本の大学を変える～ティーチング/ラーニング/アカデミック、ポートフォリオの活用』(東信堂, 2011年)
- [6] 有本章『大学教授職の使命—スカラシップ再考』(日本語訳)(玉川大学出版部1996年)
- [7] Milton Cox への単独インタビュー(2018年11月14日, マイアミ大学 Lilly Conference にて)
- [8] 間篠剛留, 他「ポスト, ボイヤーのスカラシップ論」『社会学研究科紀要(慶応大学大学院)』第79号 2015年
- [9] 主体的学び研究所映像対談シリーズ「ディー, フィンクと土持ゲーリー法一のFD対談～教育と学習に関する主体的学びについて～」(2013年6月7日)(<http://activellj.mediasitecloud.jp/Mediasite/Play/4a5df542cd284719aa5a6864f8a7f4291d?playFrom=884000>)
- [10] バー (Robert B. Barr) とタグ (John Tagg) 「教育から学習への転換～学士課程教育の新しいパラダイム～」『主体的学び』(創刊号, 特集パラダイム転換)(東信堂, 2014年)
- [11] 中根千枝『タテ社会の人間関係 単一社会の理論』(講談社現代新書, 1967年)
- [12] Ernest L. Boyer, *Scholarship Reconsidered: Priorities of the professoriate* (Jossey-Bass, 1997)
- [13] STLHE 2023 SoTL: The Party that will Change Everything Pre-Conference Workshop STLHE 2023)
- [14] Andrea Webb, “Navigating the Lows to Gain New Heights: Constraints to SoTL Engagement” (*The Canadian Journal for the Scholarship of Teaching and Learning*, Volume 10 | Issue 2, Summer 8-31-2019)
- [15] SoTL: The Party that will Change Everything Pre-Conference Workshop STLHE 2023)
- [16] Milton Cox, “Introduction to Faculty Learning Communities” *NEW DIRECTIONS FOR TEACHING*

AND LEARNING, no. 97, Spring 2004 © Wiley Periodicals, Inc)

- [17] Milton Cox, “Designing, Implementing, and Facilitating Faculty Learning Communities: Enhancing the Teaching and Learning Culture on Your Campus” (2018年11月14日, マイアミ大学 Lilly Conference ワークショップ)

◆著者紹介

土持ゲーリー法一 Gary H. Tsuchimochi

京都情報大学院大学 副学長, 教授, 高等教育, 学習革新センター長
コロンビア大学大学院比較, 国際教育学 教育学博士号取得
東京大学大学院 教育学博士号取得
弘前大学 21世紀教育センター高等教育研究開発室長, 教授
帝京大学高等教育開発センター長, 教授および学修, 研究支援センター長, 教授